

漫畫漫文

川柳子と二子

路中書

漫画漫文

川林抄



麻生路郎著



路郎氏の顔

紫舟寫



鉢巻が  
 鉢巻を呼ぶ  
 麗らかさ



一寸した  
 煙りに  
 咽せかへり



膳立も出来ぬに  
 亭主呼びおろし

子<sup>こ</sup>を連れて

仲居<sup>なかみ</sup>になつて

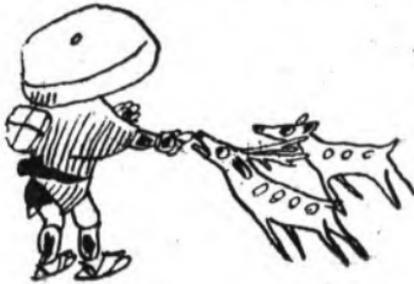
ゐるさうな



傘<sup>かさ</sup>さして

鹿<sup>しか</sup>に餌<sup>え</sup>をやる

一人<sup>ひとり</sup>旅<sup>たび</sup>



忘れ<sup>わす</sup>れ物<sup>もの</sup>が

小包<sup>こづつみ</sup>で来て

疑<sup>うたが</sup>はれ



自序

「懐手」は私の柳樽であります。

萩の茶屋にて

著者

## 再版に就て

初版は豫想外に好評であつた。川柳を少しも知らぬ人でさへ面白がつて讀んで呉れた。そして川柳といふものは面白いものですと云つて呉れた。私はもうそれで満足した。それ以上をこの本でのぞんでは居なかつたからである。再版を希望する人が多かつたけれども、つい忙しいのでその儘にして居つたが、書肆田村氏の好意で新に改訂版を出すことになつた。それで書名も「漫畫漫文川柳ふところ手」といふ長い名に改めた。

大正十三年春

取神君頼瑞尾にて

路 郎 生

## 凡 例

(一) 本書は私の人生観、社會観を川柳の形式を籍りて發表したものである。

(二) 不即不離の註解を試みたのは、川柳を全く知らぬ人が川柳を理解する上に助けともならずその微意に外ならぬ。従つて本書は川柳の入門書ではない。

(三) 作品は明治大正にかけて、番傘、新柳眉集、ツバメ、風、土園子、商業之大日本、讀買柳壇、毎日柳壇、朝報柳壇、日日柳壇等に

發表したものゝ中から選んだ。それに未發表の新作をも加へて置いた。

(四)

本書は再版を機會に菊半蔵を四六版に改めた。さうした方が見よくなるだらうと發行所から注意があつたので夫れに従つたのである。外に理由はない。裝幀は自分でやつてみた。漫畫はすべて長友柴谷柴舟氏の手を煩はしたものである。

目次

果敢さは……………	(二)
男湯へ……………	(四)
千日を……………	(六)
妾宅の方へ……………	(八)
遣る方で……………	(一〇)
泣上戸……………	(一二)
商用で……………	(一四)
支配人……………	(一六)
爪弾に……………	(一八)
内職の……………	(二〇)
女優ふさ……………	(二二)

---

月給は……………	(二四)
夜逃前……………	(二六)
投げ出して……………	(二八)
何處からか……………	(三〇)
店先に……………	(三二)
子を貰ふて……………	(三四)
たいこもち……………	(三六)
冷た茶を……………	(三八)
國を逃げて……………	(四〇)
銀行ば……………	(四二)
久々に……………	(四四)

懸取の……………	(四六)	四ッ橋の……………	(七〇)
榮え日を……………	(四八)	家の問題で……………	(七二)
運がない……………	(五〇)	始買は……………	(七四)
新世帯……………	(五二)	吊革に……………	(七六)
ひまな店……………	(五四)	一瞥を……………	(七八)
店先へ……………	(五六)	雨の夜……………	(八〇)
弱いので……………	(五八)	手を取つて……………	(八二)
劇評に……………	(六〇)	三越は……………	(八四)
異見されて……………	(六二)	月番を……………	(八六)
應接に……………	(六四)	朝顔の……………	(八八)
番頭の……………	(六六)	話中……………	(九〇)
赤帽も……………	(六八)	買ひもせぬ……………	(九二)

ぐるぐるこ	(九四)	齒が痛む	(一一八)
同郷の	(九六)	腰辨は	(一二〇)
日本人	(九八)	先生の	(一二二)
家主から	(一〇〇)	逃腰で	(一二四)
娘に水心なし	(一〇二)	差向ひ	(一二六)
親子程	(一〇四)	私生兒は	(一二八)
ゆしの外	(一〇六)	又聞を	(一三〇)
棧敷から	(一〇八)	晩に出たら	(一二二)
泣いてゐるこ	(一一〇)	何処あるかと	(一二四)
またしておけこ	(一一二)	粉煙草に	(一二六)
尼寺に	(一一四)	牛肉屋	(一二八)
湖へ	(一一六)	店の者	(一四〇)

長男は……………	(一四二)	色男ぶつて……………	(一六〇)
新世帯ただ……………	(一四四)	帯を解くさ……………	(一六二)
別るる日……………	(一四六)	御前様さ……………	(一六六)
卒業校……………	(一四八)	少年易老……………	(一六八)
店先で……………	(一五〇)	立てかけて……………	(一六八)
長男は兎に角……………	(一五二)	引け過ぎの……………	(一七〇)
出は出たが……………	(一五四)	左遷される……………	(一七二)
二人がかりで……………	(一五六)	泣言を……………	(一七四)
創立に……………	(一五八)		
大阪の三俱樂部……………	(一七三)		
丁稚の一日……………	(一八〇)		

目次終



路郎著  
柴舟漫畫

果敢さは車掌の戀の剎那主義

國を出でて拾數年未だ油中の蛟龍たるに過ぎず。既に三十の坂を突破して安下窟に膝頭を抱く身には異性の匂ひ程嬉しきものはあらう。鉸の切れぞこないも、時に御用捨下さるべし。「次は四ツ橋、四ツ橋交叉點で御座います。」



男湯へ皆連れて行く日曜日

さらりいまんてんち  
月給取の天地は一週一度の日曜に有るこさいふだけ  
やぼなりせいようてねぐい  
野暮也。西洋手拭をふらさけて「皆んなお父様に  
ついて来い。」



千日せんじちを後戻りあともとする懐手かたこちて

金かねを持たれば散歩さんぽが出来できず、散歩さんぽをすれば何なにか喰たべ  
ればおさまらぬのが日本人にほんじんの常つね、殊ことに贅ぜい六一派はに於お  
て然しかり。



妾宅の方へ電話を先に掛け

市會議員さいふ肩書の手前でも眞ッ直ぐに本宅へ歸  
へることは一種の風辱さ心得、宴會の折は必ず  
妾宅の臺所に運ばれ一寸一本つけさせるもてな  
るべし。



遣る方て手傳ふてゐる飽屑かんなくつ

「お錢あしが入りまッかいな。邪じやま覺あきになつて仕様しやうがおまへ  
んれ。」と大きおほく出でる。「こッちへ貸かしなはれ。」と炭すす  
俵たはらへドドく積つめ込こんでくれる。普請場ふしんばでは女尊ぢよそん  
男卑たんのひ。



泣上戸又首なみじやうごまなくびになる事ことをいひ

己おのれの無能むのうを棚たなへ上げて課長くわてうの悪口わるくち、社長しゃやうの揚足あげあし  
取とり、これも飲のまざれば出でめさは情なさけなし。



商用せうようて来たま頃ころはまだ舞妓まいこなり

「あの頃ころは随ずいぶん分ぶん可愛かわいかつたぜ。」さ旦那だんなの眼めの縁ふちはほんのりさせり。「今いまかて？」「さあ、それは……。」  
「憎にくらてしい？」「當あたらずさ雖いへども遠とほからず。」「まあ。」  
さ女まんなは夢ゆめ二式にしきの臆まつげをしばたたく美うつくしさ。忘わすられぬものはあの頃ころなりけり。



支配人時計を見ると歸る也

襟然たるダイヤを光らしてゐるのも支配人也。他人  
に聞かれては困る電話のかかるのも支配人也。仲居  
を應接へ通すのも支配人也。自動車で豫定の行動  
なされるのも支配人也。支配人なるかな。



爪弾つるびきに立止たちどまつてる出前持でまへもち

出前持でまへもちは肩かたの抜ぬけたやうな印しるし絆はんとん天うへの上あまじろへ青つ白まい月つき  
の光ひかりを浴あびて立たつてゐた。

寒いさむ晩ばんだなアおも思おもつた。ああ、金かねさへああればなアおも思おもつた。



内職ないしよくの溜息ためいき斗たり子こに聞きかし

巡查じゆんさと内職ないしよくこれ一種しゆの惡縁あくゑんなり。渴かつしても盜泉とうせんの  
水みづを飲のまず、これ内職ないしよくある所以ゆゑん也。詩人しじん啄木たくぼく歌うた  
て曰いはく。「ばたらげご働はたらけご猫ねこわが生活くらし樂らくにならざ  
りぢつと手てを見みる」と。



女優ぢよゆうふと家庭かていを思おもふこともあり

華はなな舞臺ぶたいから逃のがれて、そこ安樂椅子あんらくいすに身みを投げ入いれた女優アクトレス、誰たれにいふこともなく「他人ひとをあざむき、我われをあざむく生活せいくわつにも飽あきつした。アクトレスさいふ虚まよ偽まの名なに懸こひしてゐた妾わかしの淺あは薄はさ。考かんへれば考かんへる程ほど詰つまらない。一層そうのこき鈴木すずきサンの自由じゆうになつて見みやうかしら。」



月給は養生をする支けもなし

近頃トント病氣に罹つてゐる餘裕がないさは有識無  
産階級の人々の繰言。郊外生活、簡易生活、  
安假生活の大流行。



夜逃前樂隊迄も雇つて見

コレで不可れば三十六計の奥の手を出せばかりと樂隊を雇つて朝から晩迄ドンチャンく。粗惡な品を高くうりつけやうと苦心慘憺。



扱<sup>な</sup>げ出<sup>だ</sup>してやるは妻<sup>つま</sup>への年賀<sup>ねんが</sup>状<sup>じょう</sup>

「旅行<sup>りょこう</sup>中に付<sup>つき</sup>年<sup>ねん</sup>末<sup>まつ</sup>年始<sup>ねんし</sup>の禮<sup>れい</sup>をかぐ。」と廣<sup>かう</sup>告<sup>こく</sup>を出<sup>だ</sup>し

て置<sup>お</sup>いて置<sup>お</sup>炬<sup>き</sup>燵<sup>たん</sup>のさし向<sup>むか</sup>ひ。

ほろ酔<sup>え</sup>ひ機<sup>き</sup>嫌<sup>けん</sup>で年賀<sup>ねんが</sup>状<sup>じょう</sup>を見<sup>み</sup>てぬる。

「お前<sup>まへ</sup>に來<sup>き</sup>てるよ。」

「アラさう。」とささも嬉<sup>うれ</sup>れしさうな新妻<sup>にいづま</sup>ぶり。



何處どこからか番頭ばんとうの出だす交際費かうさいひ

拾五圓せんごえんの月給げつきふが物價騰貴ぶつかとうきでやうやう貳拾圓にせうえんになつた  
番頭ばんとうサン、家うちには女房にようぼうもあれば子こもあつて家賃やちんを  
きけば拾貳圓せんじふえんですさいふ。時ときに微塵びくじんを帯おびて踊かへる、  
けだし商用せうようでもなささうなり。兎とに角日本かくにほんさいふ圓くわん  
は不思議ふしぎな國くになり。



みせさま  
店先にお客とおもや乞食也

みせさまひとまはい  
店先に人の氣配、お客様かさ腰麻から顔を出せば  
「ごうぞ、お餘りをやつこくなはれ。」さいふ。人生  
は斯くの如く皮肉に葦立てられたるなり。



子を負ふて小火の隣も呼び出され

「添乳そへちをして早はやうから寐ねましたんで一時頃じごうかも知れま  
へん。ハツキリした事ことは分わかりまへんが便所はばかりに行きま  
して何なの氣きなしに隣となりの方ほうを見みますと倉くらと倉くらの  
間あひだ、ほッほッ赤あかいものが見みえまんね。今頃いまごろあ  
んな處ところに火ひのある筈はずもないが考かんがえてる間に、一面めん  
の火ひになりましたので喫驚ひつくりしたやうな譯わけだんね。」と  
小火ほやとなりの隣かみのお神せおサン、背負せおふた子こをばゆすり上げたり



たいこもち家へ歸つて腹を立て

大儲徹底せざれば幣問たりむたし。淺野内匠頭を  
出すべからず、ここが商賣と無念の涙ぐつと呑み  
込み我が家をさして立ち隔らざるべからず。その妻  
たるものまたかたいな。



冷<sup>ひえ</sup>茶<sup>ちや</sup>を飲<sup>の</sup>んで一<sup>たい</sup>体<sup>なんじ</sup>何<sup>ごと</sup>時<sup>じ</sup>頃<sup>ころ</sup>

うけ賣<sup>う</sup>りの資<sup>し</sup>本<sup>ほん</sup>論<sup>ろん</sup>に時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>の空<sup>くう</sup>費<sup>ひ</sup>を苦<sup>く</sup>痛<sup>つう</sup>さばせず。河<sup>かは</sup>  
かみよかせ 上<sup>かみ</sup>博<sup>よ</sup>士<sup>かせ</sup>も福<sup>ふ</sup>田<sup>た</sup>博<sup>はく</sup>士<sup>せ</sup>も吹<sup>ふ</sup>き飛<sup>と</sup>ばす勢<sup>いきほ</sup>ひ破<sup>は</sup>竹<sup>ちく</sup>の如<sup>ごと</sup>くにし  
て何<sup>なん</sup>人<sup>びと</sup>も矢<sup>やお</sup>面<sup>もて</sup>に立<sup>た</sup>つべからざるなり。

「サボター樹<sup>じゆ</sup>はストライ樹<sup>ま</sup>に似<sup>に</sup>て非<sup>ひ</sup>なるものです。」と  
珍<sup>ちん</sup>論<sup>ろん</sup>虹<sup>にじ</sup>の如<sup>ごと</sup>し。



## 國を逃げて来て福島の口入屋

「紡織へ行つて見たらどうや。」と口入屋の親爺願  
尊大なり。結界の内より眼鏡越しにジロツロ見  
据えること久うして「物は相談ちやが、あんたのや  
うな可愛らしいのがあつたら、世話がしてみたいと  
いふ深切な男もあるが、その方にすれば毎日お  
しいものを喰べて寝轉んで暮らせるか……。」と猫  
が息を捕へる眼つきなり。御用心々々々。



銀行は丁種ていしゆの夢ゆめを見るところ

大商店だいしょうてんの丁種ていしゆクン、例れいによつて例れいの如ごとく銀行ぎんかうの火鉢ひばち  
に凭よりかかつて邯鄲かんたんの枕ゆめまくら。自動車じどうしゃにサント藝者げいしや  
や舞妓まいこを積み込んで全速ぜんそく力で走はしつて居ゐる。



久々に行けば子供が死んだとこ

まるまるふと  
丸丸と肥大つてぬたさいふこそが其の親々の第一の  
印象なり。残しゆきし玩具は追憶のよすがもな  
り、涙の種ともなるべし。  
あす おもこころ あだざくら  
明日ありと思ふ心の仇櫻さいひ、世の中は三日見  
ぬ間の櫻かなさいふ。然りさ驛子を失ひし親さし  
てさう簡單には歸められず。



懸取の待つは火のない火鉢なり

請求書が来て居らぬまで買ふたものなら御存上の答  
今日は晦日主人が留守では済まされぬ答、あるもの  
が無いからさは今更言へぬ答なり。「持たぬ者は持て  
る者よりも幸なり持つことを得べければなり、さ  
て哲人振つてもぶらいでも無い程強いものはなし。



樂え日まかひを避けて電話の御注文でんわごちゅうもん

五拾五錢せんごの米こめが六拾二錢せんにに、二拾四錢せんさの砂糖さとうが五拾錢せんに、六拾六錢せんろくの牛肉ぎゅうにくが壹圓拾錢せん（米騒動こめさうどうのあつたとしなつ）の夏せの翌年よくねんの夏なつの比較ひかく）になつても三越みつこしや大丸だいまるや白木屋しらみやや十合そがふでは、ますます繁昌はんじようする計りばか。流石さすがに女をんなならでは夜の明けあけの國くには違つたものなり。



運がないやうにいふてる不孝者

「家が大切ひ、女が大切ひさ聞かれた時にはウンザリしてしまいました。」さ彼はボケツトウキスキーをグツと飲み干した。

「私は勿論女を棄てませんでした。そして二人で旅から旅を流れて歩きました。その間には相場に手を出して女を泣かしたこともありますが、要するに私には運がないのでした。遂々女は私から離れて行かればならないのでした。」



新世帯しんじよたいと仰山げうざんな洗せんひ物もの

やくきよくほどそうだ、あらひこか  
薬局程に曹達、洗粉を買ひ込んで、くはしいこそ  
は本をひろげて研究けんきうをする新世帯しんじよたい。

「あなた、誠にすみませんが、その鹽たらひの水みづを捨てて  
てうだ、  
頂戴とうだいな。」

「ああ、よしよし。」と耶君やくん尻端折しりはしをつて大車輪だいしゃりん、二  
りかかりの洗せんひ物もの。



## ひまな店みせじゆんざ巡査ちよつとこしも一寸腰こしをかけ

巡じゆんかい回かいも大おほ跨またに歩あるけば早はやく歸かへり過すぎる。トやと申まうして見み馴なれた町まちを龜かめの子こ歩あるきもくださらぬ。勢いきほひ閑ひまで欠あく伸ひをしてぬさうな店みせ先さきへ腰こしを下おろして「なんかがボロイ仕事しごとはないかなア」と相あ共ひともに生せい活くわつ雜なんの聲こゑに和わてゐる。



店先へ母親が来て立話

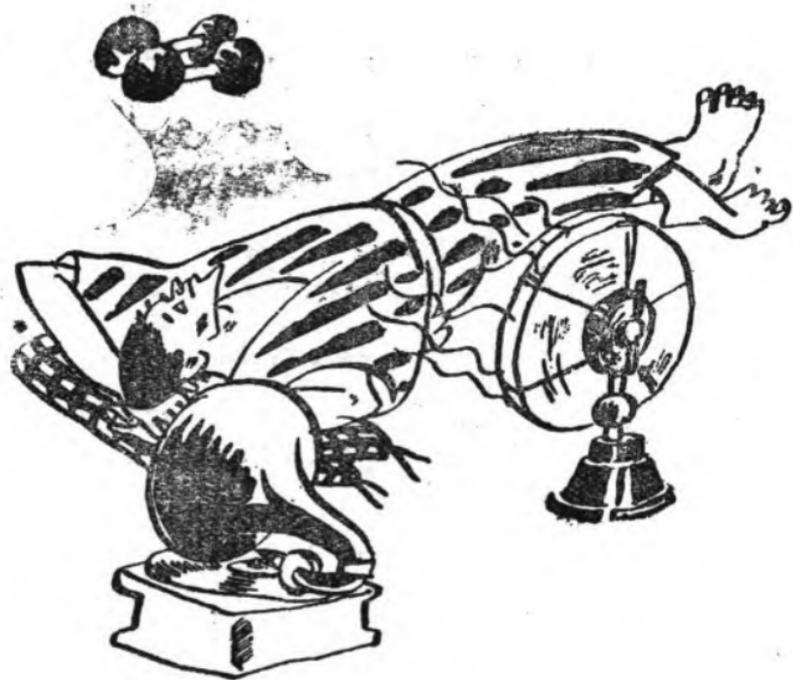
「御主人を大切にしなければや。友達に悪まれんやう。  
人の用事でも自分でするやう、買喰ひをせぬやう。  
せいでい商賣を勉強しなければや。」と囁んでふくめ  
るも母の慈悲。「コレをあげるサカイ。」と十銭紙幣を  
三枚呉れる。



弱よはいので帳場てうばの方は人ひとまかせ

蓄音機ちくおんきと扇風機せんぷうきに午睡ひるねの夢ゆめまごひならず。 餓てつあらい亞鈴いは  
室むろの一隅いっくにあり、机上きじやうけんかう健康法けんこうはふの書籍しよせき二三ににして

たゞまらす。



劇評に女優は逢つて言ふ氣也

それもさうかと思はぬが女の常、まして自惚の權  
化、アモ女優サンにおいておや。女役者ご罵ら  
れたとて面膨らし、劇評悪しとて御機嫌斜ならず  
今日も今日さて「太陽新聞」の演藝記者さまあらう  
ものが、怎うしてあゝ批評眼が低いんだらう。妾の  
科が臭いなんて、大體あの天岸さかいふ男、いけ  
好かない奴さ。てんでお芝居が理解てぬない癖に……  
「……」さうく其通りなり。



異見みけんされて見ればみ一々いっくくもつとも御尤

濟すますトきものは宮仕みやつかへ、今日けふも今日けふさて呼よびつけられ  
ての強異見こわあひけん。

「君きみは未まだ若わかい」ミボンと眞正まぜつめん面めんから一本いっぽんやられる。

「一いっ體たい生意氣なまろきだよ。」と吐はき出だすやうに言いはれる。

かくして免職めんしよくが近ちかつきつある也なり。



應接に忘れられたのかと思ひ

一本一本、一本と數品の煙りは果てしなく立ちのぼる。

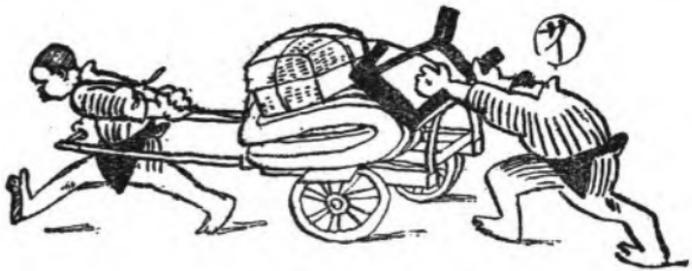
平凡な寫眞帖も二三度ひつくり返した。

ああ應接の時計動ひす。



番頭ばんとうの宿替やどがへこ小僧せうか借りられる

嬬とうさんのお供とも、御隠居ごんきよの送り迎おくむかへ、若旦那わかだんなの密使みつし、  
今日けふは番頭ばんとうさんの宿替やどがへこ、小僧せうかさんの修業しうげふも容易とろいには  
あらう。



赤帽も呼ばず三等ひツ背負ひ

でんしん おほさかけんよつ べんけい  
田 紳の大坂見物。辨慶の七ツ道具式にひツ背負ひ  
べんたう べんたう びーる  
「辨當、辨當」。麥酒にアンパン。サンドウキツチに  
お茶ア。新聞に大阪バツク、仁丹に清心丹。」  
わうさわう なかき ね かいさうぐち ながで  
往左往する中を切り抜けて改札口へ流れ出る。



### 四ツ橋の時計をあてに待つており

マワソル片手にマガレット赤いホストに寄り添へば  
戀しき君を待つ姿なり。「もう十五分で二時だのに

……………」さ女は屢々眼をあげて時計を見つ。

兩行の電車が二十五秒過ぎたとはよくも數へたり  
この根氣戀なればこそ。



家の問題で社長体むなり

社長の休み、ただし病氣にあらすこの噂。  
「なかくはつてんか  
中々發展家ですからなア。」さ知つたやうなことを  
いふ。



鉛賣は何處の子供か抱き起し

五風、一錢も天下の寶。銚をならして大道にひまぐ

鉛賣の眼にも涙はあるなり。

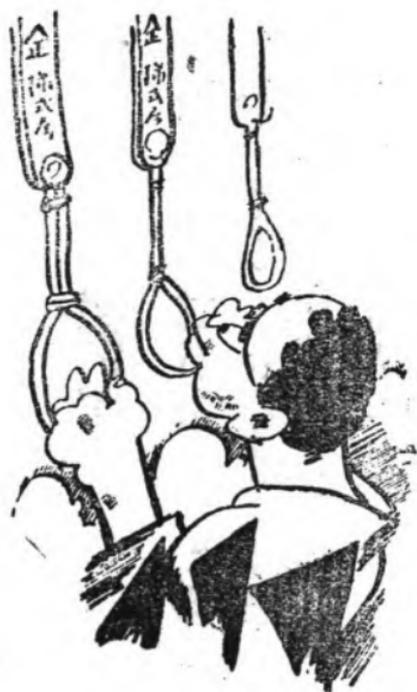
「泣くんやないで、これをあげるサカイ」さ商品の

鉛を惜しげもなし。



吊草つうくさにもう店みせの名なが残のこるだけ

昨さくの成金なりきん、今日けふの歩ふみ。  
榮枯盛衰えいこせいすいは猫ねこの眼めの如ごとし。



一 警べつをくれて義太夫ぎだゆう語り出だし

二階一隅かいぐうの堂どう摺連すりづれん一人々ひとりごとに思おもはせ振ぶりな一警べつは身みも魂たましひに添そはさるべし。いつそ逢あはればこの胸むねが……  
「を生しやうで行ゆかうさいふ奴やつなり也。末すへの末すへまで思おもはれば  
こそ此このみち道の妙めうはあるなり。



雨の夜電話でさきへ寢よと云ひ

今様お聞は眠むらんさして眠むられず、うつらく  
さ長火鉢に凭り懸り、雨を聴くさま哀れにも風情深  
し。折柄けたたましき電話の鈴。今夜もお歸りなさ  
らぬと見へたり。



手を取つて釣を教へる居候

五錢の珈琲にパウリスタの雰圍氣を知らざるべからず。撞球も五六十は突かざるべからず。碁も初段に四五目の腕前たらざるべからず。二科の批評からひとえもの洗濯位やつてのければ居候たり難し。



三越は稼いだ金で買へぬとこ

問題は八時間制にあらず。

食ふに米なく、住むに家なき時代にあらずや。

「榮々日」「木綿ア」に一反の木綿ものすら手にし

得ざる時代にあらずや。「嫁ぐに追ひつく貧乏なし」

の古諺遂に死せり。



月番を露路の妾は五月蠅がり

「わて、もう露路はいやだすは、天下茶屋邊で良さこ  
おまへんやるか。」さ旦那の膝にしなだれかゝる。

「たつて辛らけりや、そりや怎うともするがな……。」  
さ旦那突よつほど惚れてゐる也。



朝顔あさがおの前まへで爪切つまる夏なつやすみ

世よを擧あげて勞働らうどう問題もんだいで呻うめき叫こゑんでゐる時とき、親爺おやぢが  
ら月給げつきふをさつてゐる學生がくせい諸君しよくんには海うみに山やまに愉快ゆくわいな  
夏なつが待まちつてゐる。



話中待つてる間ヲツバ節

でんわ おはなしちうほごしやくさ  
電話の御話中程小癢に觸るものばなし。唯突ッ  
立つて待つてゐるのも曲がないので、眞ッ黒氣のけ  
から、なんて間がいいんでしょ、ヲツバ節から、さ  
すらひの唄に至るまで知つてゐる唄さいふ唄を一ト  
通し  
通りおさらへして「アアモシモシ本局のネ三五四〇  
番。」お話中。には閉口頓首。



買ひもせぬ客にタンクステン光り

「コレなんぼしまんね、アレは幾何だす。」と觸らい  
さかして何一つ買ひもせず。アア。タンクステンの  
み光る。



## ぐるぐると廻して元の様をとり

あれでもなし、これでもなしと女が懞た懞む程、  
限のなきものはなし。色の好みもあるなるべし。顔  
映りなども考うるなるべし。懐きの相談もあるべ  
し。流行にも心ひかるるなるべしなご思へば肩の凝  
る話なり。矢ッ張り怎う考へても元の懞り良ささ  
なり。この時の心理状態は男には分らず。



同郷の人を頼れば二階借

二階一ト間ぎり、電燈付きの拾圓では新來の客の  
満足を買ふによしなし。

夜の道頓堀と新世界の通天閣をサマ自分のもの  
やうにして觀せて呉れたのが關の山。



日本人借りて来てまで貸してやり

「僕にまかしてくれ」さすぐに輔隨院をきめてかか  
るのが日本人の常なり。まかり違へば腹を切つても  
この申譯はするつもりなり、現代にこの心あるも  
の稀なるは大和魂も歐化せるにや。



家主やぬしから勸すすめられての觀世流かんぜりう

小論こうろんの心得こころえとしては「序じよから論ろんひます、それに小  
論ろんは必ず止とどまりを返かへして論ろんひますが婚禮こんれい、養子ようし、出  
船せんなどの時ときには返かへしを論ろんはんこまになつてゐます。」  
と聞ききもせぬこままで聞きかしたいのが持病じべう。



娘むすめに水みづ心こころなし下宿げしゆく替かへる也なり

「てんくまはま轉々ま極きりなし下宿げしゆくの緋ひ耕が」で氣まに入いらぬこと  
のあれあすば明日あさつての明後日あさつての言いはず今日こんにち只今ただいまより、一  
燈とうひッ提さげてサツサでと出ゆて行なくの也なり。素人しろうと下宿げしゆく娘むすめ  
サンしよせいと書か生せいサンま、切きつても切きれぬ癖あかの他人たにんさばなり  
終まはんぬ。



親子程遠ふに出雲氣紛れな

「お金で自由かぬじゆうにされてまんね。誰だれが好すきこのんで、  
あんな油あぶら蟲むしみたいなお爺ぢいさんさ一箱いっしょよになりまつか  
いな、ほんまに因いん果でわだつせ、一體いったいごうしたらよろし  
ゆうおまツしやろ」若わかい女房にようぼうの氣苦まじく勞らうも秋あきの夜長よながに  
聞きいてやるべし。



めしの外息子二階をおりて来ず

ニキピとヴライオリンを加ふれば現代式青年を得  
るなり。戀を語るにはエスメラントを便さし、音楽  
會の入場券を賣りつけられては一種の誇りを感じ。  
常に歌劇俳優たらんことを理想とせり。



櫻敷さくらぢまから首くびをのばすは鼻負ひいさまなり

「ごりよんさんはつてんはつてんやくしやかとと御察人の發展は役者買ひに止めをさす。」「藤十郎の戀こひを三度見たなとは何を意味するにや。

「女をんなのあそぶのは知れてまッせ。」と辨解べんかいをするうちが花はななり。金齒きんばのひらめき、金剛石ダイヤのかがやき、錦きん紗しやの装よそはひ、成貧なりひんの夢ゆめ近ちかきにあるべし。



泣ないてゐると知しつて話はなしを片かたづける

女おんなは黙だまつて俯うつむ向むいてゐた。

「もう其その話はなしは止よさう。」と男おとこは火ひのない火鉢ひばちへ敷しき  
島しまの吹殻すいからを突つきさした。



またしておけと朝顔あさがおに水みづをやり

らくじつ  
落日らくじつはあひあきさ輝かがやけり。三歩さんぽの庭にはには涼風れいふう到り  
ワイシヤツぬを脱ぬげは一日いちじつの勞苦らうくは夢ゆめの如ごとく消きゆ。茲こゝ  
に於おてい、あすの希望きぼうを朝顔あさがおにつなぐ。



あまでら  
尼寺にまだ煩惱の燃ゆる弟子

おもひ出さすに忘れずにある今の身の一入秋の哀れ

さよ。

戀は懲うしたものは誰れが定めた掟であらう。口

にお經は稱へてぬても心はいつか上の空、さても

是非なきは女ごころか。



湖<sup>みづうみ</sup>へ竹<sup>たけ</sup>の皮<sup>かわ</sup>から鮓<sup>すし</sup>が落<sup>お</sup>ち

秋<sup>あき</sup>の近<sup>ちか</sup>江路<sup>あふち</sup>は君<sup>きみ</sup>と僕<sup>ぼく</sup>との世界<sup>せかい</sup>なり。八景<sup>はっけい</sup>は巡<sup>めぐ</sup>らすも飲<sup>の</sup>んで食<sup>く</sup>ふて一<sup>いつ</sup>日を消<sup>け</sup>すに充<sup>じゅう</sup>分<sup>ぶん</sup>なり。



言が痛むことにして置く養子なり

平地に波瀾を起すべからず。意見は發表せざるをよし  
しとす、萬止むを得ざる時には「………思ひます。」位  
に止むべし。態度は總て平蜘蛛式。時に小守と奥様  
の芝居行の留守居役を辭せざること肝要なり。養  
子たる者の眷々服膺すべきこと之れにて盡きたり  
と言ふべからず。



腰辨こしべんはせめてはといふ子こを育てそだ

にちよりあさ、さいくんとこせついちば、おくだ  
日曜の朝は細君を公股市場へ送り出すこと。

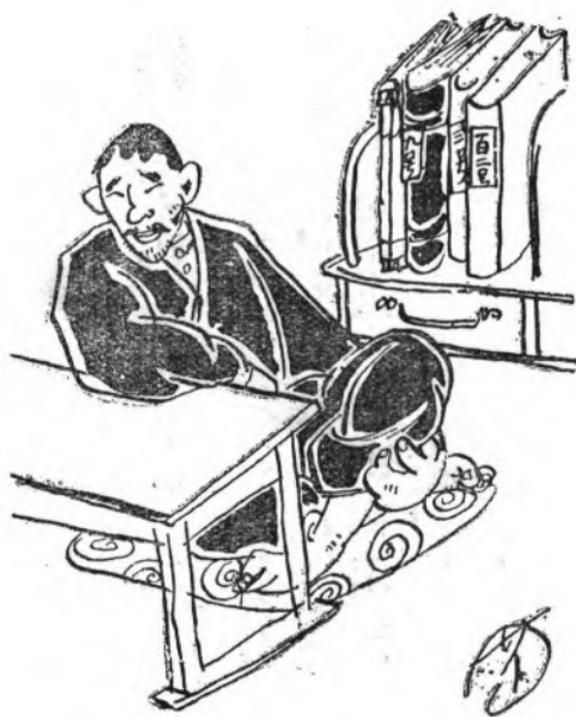
あかごもやく  
嬰兒の護り役をすること。

いま、げつさふ、ちよちう、お  
「今の月給では女中を置くこと思ひもよらず。せめ  
ては我が子に相當の暮らしをさせてやりたい。」とは  
めまゝ、ぬものがたり  
夫婦の寢物語。



先生の書架圖書館の本ばかり

「物似が狂騰すれば月俸も暴落してゐるこそを意味するんです。自分の力で丸善の空氣はさても吸へませんよ。」と先生の顎髯が大分延びてゐる。



逃腰にげこしで値切ねぎる植木うゑきはまけてくれ

夜店よみせの植木うゑきは半値はんねに値切ねぎるものさきく。さりさて氣きの毒どくなやうな氣きもする。袖こわごわた々々試ためしてゐる。「コレなん幾なん何なにだす。」植木屋うゑみやは黙だまつて片手かたてを出だす。「廿五せん錢せんになれへんか。」とソロソロあると歩くのも豫定よていの行動こうどう。



差さし向むかひ此處こゝまで月つきの影かげささず

家うちや外そと、外そとや家うちなるありさまも天あま降くだりの女房にようぼうが氣き  
に入いらぬためなり。

女をんな狂くるひさ酒さけびたりに豊ひるさ夜よるさの差別さべつがつかず。腰こし  
藤れんの影かげも日に薄うすれゆく。



私生兒は母の標織と父の才

私生兒私生兒さいふ勿れ。ピヤノの妙手として、新  
進の畫家として其の才能を發揮すること青年藝望  
の標的たり。若き女の捨てて置かぬも無理からぬ  
こと、これで墮落をせれば木の股から生れたること  
疑ひなし。



又問を話す按摩の二三軒

「ア、あすこのことだッか。聞けば聞く程氣の毒だ  
んな、モトモト嫌ひでもなんでもないのを姑ばんが  
鬼みたやうな人でな、別れさして了やはつたんだす。  
さいつまででも按摩の話は續いて行くのが妙也。」



晩ばんに出でたら買かふて來くる氣きの齒磨粉はみがきこ

盗人ぬすびとを捕とらへて繩なわをなふさいふ事ことあり。朝あさになられば  
齒磨粉はみがきこのなくなつてゐるのを思おもひ出ださす。今晚こんばんこそ  
出だたらと思おもへど、晩ばんが來くるさ朝あさのこさまで考かんがへて  
居まらす。



何々あるかと問へば抜いて見せ

光つたものを指にもたれば肩身がせまく覺ゆるも女の常なり。

何々あるかを聞かればいささか手持舞沙汰に感ずるもお可笑し。



粉煙草こなばこにいい智慧ちゑのて出るは簞ばもなし

いろをこかぬちから  
色男いろをとこに金かねさ力ちからのないこは昔むかしから相場さうばがきまつ  
てゐる。

あるものと言いへば借金しゃくきんと質しちの利札位りふだぐらゐなもの。三疊じやう  
の二階かいたへ立たて籠こもつてから既すでに半歳はんざいは夢ゆめの如ごとし。



牛肉屋商用と見て捨てておき

酒さ女まひ きんなで攻め落おとす作さく眼せん計けい劃かくも第一線だいいせんは牛肉屋まうにくや。

「おい、姐ねえさん、用ようがあつたら。」さ追おひ拂はらはれる迄まで

もなく、商あきなひは道みちによつて賢かしこい姐ねえ様達さんたち。

「では御ごゆつくり。」と立たつて行ゆく。



店の者飲む算盤もおいで見る

「ぼり半で前景氣をつけるさして是位はいる」さバ  
ナリ。「多喜の家で三人しらしアツサリ遊ぶさして  
も之れ位は飛んで了ふ」それに自動車かザツさ之  
れ位」さ又バチリ。勘定合ふて錢足らす。



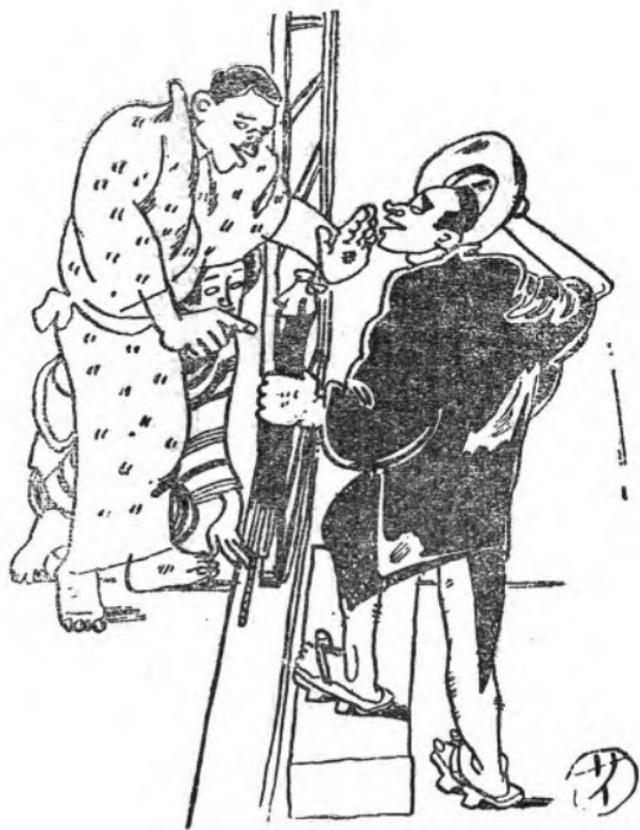
長男はせめられぬいて嫁を持ち

親孝行を強ひられ、嫁を持つことを強ひられ、早く孫をこしらへることを強ひられ、家の體面を汚さぬことを強ひられる、惣領の甚六の責任や大なり。



新世帯だ一本の傘を貸し

傘さほ籍さ風呂敷さば貸したむ脱期、なしのつぶて  
の音沙汰なし。「隔らトさかれて思へば貸してやる傘  
にも悪しき方を出すべし。」さ洒落やうにもタツタ一  
本さは新世帯のサモあるべし。



別<sup>わか</sup>るる日<sup>ひ</sup>飯<sup>めし</sup>の白<sup>しろ</sup>さが眼<sup>め</sup>立<sup>だ</sup>つなり

人間<sup>にんげん</sup>の歴史<sup>れきし</sup>を一面<sup>めん</sup>から觀察<sup>かんさつ</sup>すれば涙<sup>なみだ</sup>の歴史<sup>れきし</sup>なり。

他の一面<sup>めん</sup>から觀察<sup>かんさつ</sup>すれば女<sup>をんな</sup>の歴史<sup>れきし</sup>なり。敢<sup>あへ</sup>て女性<sup>ぢよせい</sup>中心<sup>ちゆうしん</sup>説<sup>せつ</sup>を稱<sup>と</sup>ふるには非<sup>あら</sup>ず。

明日<sup>あす</sup>からは切<sup>き</sup>つても切<sup>き</sup>れぬ垢<sup>あか</sup>の他人<sup>たにん</sup>と言<sup>い</sup>ひ、冷飯草<sup>ひやめしぞう</sup>履<sup>り</sup>の花緒<sup>はなを</sup>さへ切<sup>き</sup>れて心地<sup>こゝち</sup>のよいものかさいふ、むべなり。



卒業後逢へば赤靴履いて居り

綺麗に分けた頭髪と、折目のついた洋服と、赤いネ  
キタイと、縞のワイシャツと、縞リチヨツキと、赤い  
靴とステツキと、頭のとつべんから足の爪先に至  
るまで、凡そ當代に於けるハイカラ振りを遺憾なく  
發揮して學生時代の鬚カラ味更になし。



店先みせさきで雜貨屋ざっかやに又待またまつてくれ

店みせに居をつては留守るすさも言いへず、ひたすらに懇願こんぐわんし  
たつまつて今いま一人ひとり歸かへした處ところだ。エイ曲まよかない雜貨屋ざっかや  
だなア。常日頃つねひごろの辯舌べんぜつも今日けふさなつては薩ささ張はり駄だ  
目め、アノさソノそで一ト汗あせかいて追おッ拂はらふ。



長男は兎に角店で使はれる

「商賣人に學問はいらんもんや。」さ昔氣質の一人  
極めから小學校だけであけられた長男、店の小僧に  
立ち交つてこき使はれる。「醫者遊びも商賣道具  
の一つ。」さまけてぬぬ息子。



出は出だが養子里へは歸られず

「假令養子でも妻は妻、馬鹿扱ひにはされたくない。」

ミケツと飲み乾すコッパ酒。

「南洋、南洋。」も口の内。



二人ふたりがかりでアイスクリーム出来上りできあがり

家庭圓滿かていゑんまんに無暗むやみと満足まんぞくを表あらわしてゐる若夫婦わかふうふ。影かげの

形かたちに添そふが如ごとく何なにをするにも二人ふたりがかり。

日曜にちようは可愛かあいらしい子供こどもを乳母車うはぐるまに入れいれさせて動物どうぶつ

園えんにあそぶ。

「美人びじんでもないのに亭主ていしゆの手てを繋つなぎ」の口くちなるべし。



創立に誇のはねも氣がつかず

「資本金は壹千萬圓にせんさばが利きまへん。百萬  
や貳百萬の會社はザラにありまツさかいなア。」とサ  
モ忙がしさうにMCOの煙りをゆらくこ鼻の穴か  
ら立ちのぼらせる。何れば事務取締役の夢でも見  
てゐるのであらう。



色男いろまんとこぶつて剩錢つろせんしてやられ

のみたくも無いな煙草たばこも買かはざるべからず。手てから手て  
に渡わたして買かふ光榮くわうえいに浴よくせんが爲ためなり。  
「一寸ちよつとお點つけいたしませう。」の美音びおんに接せつせんが爲ため  
なり。



帯おびを解とくと女工ぢよこう一鏡落せんおとすなり

知しつてぬるものさ言いへば八八はちはちに阿彌陀あみだくじ鏡きやうに俗談ぞくえうごらゐ位い  
なものなり。手紙てがみ一本ほん碌ろく素すッばに書かけす、女ぢよの知し  
るべきことを知らず、知しるべからざることを知る。  
それでも勞働問題らうどうもんたいを口くちにせざるべからず。選えらまれ  
て華盛頓わしんとんへ行ゆかざるべからず。惡にくまれ口ぐちもこれ位ぐらゐ  
にして置おく入いし。



御前様と言はれたい程金が出来

醫者あそびも飽きか来た。香水風呂も物足らぬ。  
金で買いたい御前様、浮世の慾に果てしなし。



少年易老學難成 講義錄

勉強べんきやうもする積つもりなり、成功せいこうもする積つもりなり、ただ

實行じつかうが出来できぬだけなり。

講義こうぎ録ろくは机き上じやうに順序じゆんじよよく積つまれたり手摺てあか一つ一つ

ぬのも面白おもしろし。



立てかけておいて梯子の禮をいひ

「お蔭さまで助りました。近頃の家主は雨が漏らうが洩るまいが家賃だけは遠慮なしに上げることを知つてゐるので困ります。氣に要られば何時でも出て呉れさいふ始末ですからなア。」と家主の攻撃を禮の代りに言ふのも社會の罪か。



引<sup>ひ</sup>け過<sup>す</sup>ぎの辻<sup>つぎ</sup>は大<sup>おほ</sup>きく曲<sup>まが</sup>る也<sup>なり</sup>

「真<sup>しん</sup>に酔<sup>え</sup>ふたく、五<sup>しやく</sup>勺<sup>まじ</sup>の酒<sup>さけ</sup>にか。オイ君<sup>きみ</sup>、さう早<sup>はや</sup>く行<sup>い</sup>つちやいかん。我<sup>わが</sup>輩<sup>はひ</sup>はこれより大<sup>だい</sup>戦<sup>せん</sup>闘<sup>とう</sup>を開<sup>か</sup>始<sup>い</sup>するんだ。」と氣<sup>き</sup>焔<sup>えん</sup>あたるべくもあらず。



左遷される友の手荷物提げてやり

「言ひたいことを言へば嫌はれるに極つてゐるのだ。」

「嫌はれたつて仕方がない。俺は御無理御尤も頭を下げて飯を食ふことは死んだつていやだ。」

「それが世間なんだよ。」

「俺はそんな不純な世間には住みたくない。」



泣言を嘘と知りつつ貸してやり

佛の顔より母の顔、あの妓に買ぐ金ぞ知つても欺ま

されてやるのが母の慈悲。

酒もやめます。悪所通ひもいたしませぬ。今度こそ

はさいふ今度こそが怪しきものなり。



大阪の三俱樂部

似て居るの似て居ないと孫の顔

銀行集會所(一)

財界の名士とは言へど頭  
が禿げたり白髪頭になつ  
たりしては孫の話でもす  
るが國の山なり。



金かねのことになるとどうにか片かたをつけ

おぼさかくらぶ  
大阪俱樂部(二)

すみ  
隅すみついで青い顔あをかほを  
してゐる連中れんちゆうは、  
何んなにさかして損そんを  
取り返とさうと焦あせつ  
てゐるところ。



平民の分に過ぎたる遊びやう

電気倶楽部(三)

「此の間の晩は平  
鹿で、お楽しみ。」

さ一杯かける積り

が、

「サム、あれかネ」

さ出られてギヤフ

ン。



丁  
稚  
の  
一  
日

忍術で門を箒く氣の丁稚なり

でつちの一日(二)  
せうてんらん  
小 店 員 には 物 價  
の 高 低 より も 「 積  
とびさすけ  
飛 佐 助 」 の 一 舉 一  
動 が 氣 に か かる  
( 午 前 五 時 )



いい加減に机を拭くもサボタージユ

丁稚の一日(二)

小言が多いので困

るさ交配人の机

を懸命に拭く。

それでやうく四

角な机を圓く拭

くまころがシンシ

ヨ。 (午前六時)



節米と言へば丁稚はけちまつけ

丁稚の一日(三)

「冷飯許り喰べて  
てカーネギーにな  
れまッしやるか」  
さ妙なところへカ  
ーネギーを引ッ張  
り出す。「カーネギ  
ーは何んだんれエ  
」と大きな尻が一  
つ揺れた。(午前  
七時)



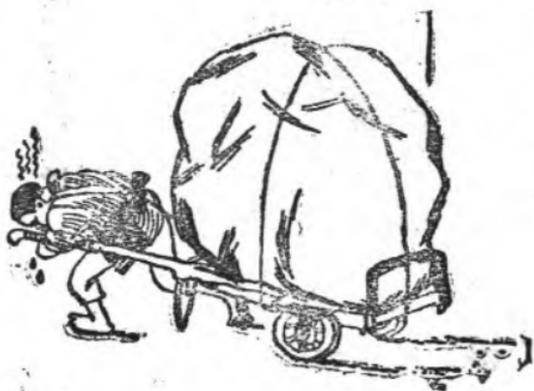
ひやしあめ  
冷飴のとこまで丁稚たどりつき

丁稚の一日(四)

かんなんなんじあせ  
艱難汝を汗にす

けつきふわつか  
月給僅に三圓

(午前八時)



懐<sup>よとろ</sup>に地圖<sup>ちづ</sup>を入れてる<sup>い</sup>丁稚<sup>でつち</sup>なり

丁稚<sup>でつち</sup>の一日<sup>いちにち</sup>(五)

「註<sup>ちゅうもん</sup>文<sup>もん</sup>せん言<sup>い</sup>やは

りまッせ。」

「.....」

「又<sup>また</sup>靴<sup>か</sup>いて附<sup>かへ</sup>りま

んのか。」と顔<sup>かほ</sup>の

色<sup>いろ</sup>が變<sup>かは</sup>つてゐる。

(午前九時)



ボストまで行くに丁稚は犬を連れ

丁稚の一日(六)

顔をみたらオイヤ  
寸さ使はれる。  
そのオイヤ寸が、  
なかなかに一寸でな  
いから困る。(午前  
十時)



駄目を押す癖を丁種はうるさがり

丁種(てつち)の一日(いちにち)

背後(うしろ)で大きな眼(め)が  
光(ひか)つてゐる。

「二十打(だ)おます。」

「たしかに有(あ)るか  
なア。」

「そんなに不信用(ふしんよう)

やあつたら自分(じぶん)で

調べ(しら)べたらあんな

いか。と言(い)ひたい

のをこらへてゐる

(午前十一時)



家中で丁稚一人が午砲を聞き

丁稚の一日(八)

飯の時間もアモク

ラシーにして欲しい。

い。

店番ばしてぬるが

心ここにあらざ

れば見れども見え

ず。(正午十二時)



ひと  
人ごちついて丁稚は味を言ひ

でつち  
丁稚の一日(九)

「そんなに喰べたらコレラになりまッせ。」

「ア、旨い。ア、旨い。料理が上手やサカイ。」

「モ、一つお汗をなうだす。」とお鍋ドンの顔がくづれる  
(午後一時)



倉の中丁稚は眞ツ黒けを唄ひ

丁稚の一日(十)

倉の中がオレ達の  
極楽境である。  
一寸晝寐と洒落  
てやらうか。(午後  
二時)



巡査じゆんさより丁稚てつちの方が世事ほうせにたけ

丁稚てつちの一日いちにち(十一)

「いそ  
「急いそぎまなれ。」

「急いそぐのばわがッ

ちよる(午後三時)



繩なわの端はしつかんだまままで丁稚てっち倒たけ

丁稚てっちの一日いちにち(十二)

荷造にづくりの手傳てつだいはよ

いむ、あさの掃除そうじ

迄までさされるには閉へい

口こう一本ほんでも釘くぎが

落おちてゐれば大眼おほめ

玉頂たまてうだい戴たい

(午後四時)



氣がつけば丁稚が水を撒かんとす

丁稚の一日(十三)

人通りのほげしい

なかしゅれんはやわざ  
中な手練の早業

でパツパツバアミ

水を撒くさ、ウツ

カリ歩いて来た奴

が横ッ飛びに逃げ

て行く。

(午後五時)



まだ喰べる氣かと丁稚はからかはれ

丁稚の一日(十四)

でんとうひかのもと  
電燈光る下  
喰べるは喰べるは  
猫啞然として  
視する。

(午後六時)



小包へ廻つた丁稚遅れて來

丁稚の一日(十五)

夜學へ通はせる條  
件で入店したが、  
行きがけに小包を  
ほり込むのが、一  
寸やそつまでいか  
ぬ。(午以七時)



勉強はする氣夜學の眠い事

丁稚の一日(十六)

ひるつかの授業  
の疲れが授業  
じかんすろみんじかん  
時間を睡眠時間に  
してしまふ。先生  
の聲が齒に齒  
に聞えて来る。

(午後八時)



夜學校一月程はつめて行き

丁稚の一日(十七)

「誰それサン。」と  
先生は重苦しい  
莊重な聲でいふ。  
「アナタの店では  
ちやうようじんざいを  
重要な人材を養  
成する爲に此の學  
校へよこされてゐ  
るのですよ。」

(午後九時)



横町の夜泣に丁稚顔が賣れ

丁稚の一日(十八)

夜學からの歸途、

夜泣鯉鮓には、

て自己の存在を意

識する。睡眠さ

飲食は、小役員

の尤も渴望せる

ものなり。

(午後十時)



盤を毀つた罪が丁稚にふりかかり

丁稚の一日(十九)

店で蓄音機をな

らしてゐる。

踊るや否や、針を

仕替へる役目を、

仰付ひる。ドツチ

に廻つても重要

人物の一人。

(午後十一時)



歌劇式で丁種は夜具を出し

丁種てつらの一日いちにち(二十)

番頭ばんとうサンの寐床ベッドを敷くのが其その日のひの御用仕舞ごようじまい、これでヤット無罪むざいはうめん放免かたし形かたち。

(午後十二時)



ミ  
三ツぱんを知らず扇風機は廻轉リ

でつち  
丁稚の一日(廿二)

せんぶうき しうやれう  
扇風機は終夜涼

ふうおく  
風を送つてゐる。

せうてんみんしずかやす  
小店は静に安

らかに椅子の上へ  
らかに椅子の上へ

なんきんむしなん  
南京蟲の騒を避

けてゐる。

(午前一時)



大正十三年六月一日印刷

大正十三年六月五日再版發行

著者印



漫畫

川柳ふところ手

定價壹圓廿錢  
送料金八錢

著者

麻生路郎

發行兼  
印刷者

田村九兵衛

大阪市東區南久太郎町四丁目十五番地

發行所

大阪市東區  
南久太郎町四丁目

田村書店

電話船場二〇一二番  
振替大阪一一三七五番

取次所

兵庫縣武庫郡鳴尾  
寺ノ後園番地ノ一

川柳雜誌社